TEIKOKU DATABANK Historical Museum

Muse

2016.9
Vol.28

帝国データバンク史料館だより［ミューズ］

温故知人09

『キューポラのある街』のいま。

鋳物産地を守る気合いと努力

川口鋳物工業協同組合
理事長　伊藤 光男さん

《逸品解題》秋田杉桶樽・仙台箪笥・東京染小紋

事業所のあった街をたずねて（特別版）～台北篇～

温故知人 09
古きをたずねて知に挑む人

『キューポラのある街』のいま。

鋳物産地を守る気合いと努力

川口鋳物工業協同組合
理事長　伊藤 光男さん

伊藤 光男さん
伊藤鉄工株式会社　代表取締役社長。
1905（明治38）年設立の川口鋳物工業協同組合の第25代理事長を務める。2016年より、一般社団法人 日本鋳造協会会長。

■再開発による住宅都市化は進むものの、いまも鋳物の街、川口

鋳物の街、川口を舞台にした映画『キューポラのある街』が封切られたのは1962(昭和37)年。それから半世紀、そのころの川口をご存じだった人々からは「キューポラなんてもうないだろう」とか「川口でまだ鋳物をつくっていたのか」と言われ、鋳物産業の火は消えてしまったと言われることが多々あります。

まさに60年代から70年代前半のオイルショックまでが川口の鋳物生産業の黄金期であっただろうと思います。全国シェア3割を占めていた川口の鋳物は、東京オリンピックの聖火台を製造、市内には鋳物会社が600社以上ありました。お札が金庫に入りきらず、足で踏んで金庫に入れたという最盛期のエピソードも残っています。

鍋や釜などの日用品を得意としていた川口の鋳物産業は、その後、鋳物の主流となる自動車産業への参入に遅れをとり、相対的に生産量が徐々に減少していきました。鋳物の製造には広い敷地を必要と

するのですが、市内の鋳物工場は小から中規模が多く、業務拡大ができずに廃業した所も少なくありません。時を同じくして川口市の再開発も始まり、工場跡地は次々に高層マンションになっていったのです。さらに、川口市から福島や茨城などへの工場移転も相次ぎました。生産高の大きい会社ばかりです。

しかし川口の生産統計は埼玉県だけですから、いくら川口発祥で当組合員であっても、県外の企業の数字は含まれません。実際は倍の生産量になるのですが、統計上は表に出てこないのです。マンションが立ち並ぶ街並みや数字だけで、川口の鋳物産業は衰退したと判断されることには、異を唱えたい。いまも川口は鋳物の街です。

■川口を鋳物の街に育てたのは独特の「買い湯」制度

日本全国に鋳物の産地はありますが、実は鋳物を製造するにはものすごい資本が必要です。広い土地と機械設備も要ります。そんな鋳物工場が集中して川口に誕生したのは、買い湯制度があったからと考えられます。

買い湯とは、文字通り湯を買うこと。湯とは、溶けた金属のことをいいます。小学校や中学校を終えて鋳物工場に入ると、徒弟制度で仕込まれ、技術を持った職人になるわけです。昔は、大体請負だから、一生懸命働けば働くだけお金がもらえる。真面目にやって認められると、親方から作業場の一角を借りられるのです。それでキューポラから出ている湯を、自分にも配ってもらい、親方に湯代を支払います。独立後に、元の勤め先の会社に間借りしているようなイメージです。そうやって資金を貯めて工場を借り、あるいは購入して起業していく。川口に鋳造業が増えていった背景には、独特の買い湯制度があったのです。

■若い世代にも、やはりものづくり志向の人はいる

私が入社した三十数年前は、若い人がなかなか入ってきませんでした。しかしここ10年ぐらいは、若者が嫌がって来ないということはありません。組合が毎年開催している鋳造技術コンクールで表彰される人の中には若い人たちも多くいます。

高校の就職を支援する先生から聞いた話ですが、頭の良し悪しではなく、生徒の約30％はデスクワークが苦手で、体を動かすのが好きだと言います。ですから必ずしも誰もがクーラーのあるオフィスでホワイトカラーを、と望んでいるわけではなく、ものづくりをしたい人はやっぱりある一定の割合でいます。むしろ川口みたいな人口が多い地域の方が、そういう人材に当たる確率が高いと思います。私の会社も未だに溶解はキューポラでやっているのですが、鋳造の造型が自動造型だからなのか、鋳物工場の社員は、平均年齢は多分30歳そこそこです。

若い世代や後継者不足は、要するに経営者が努力を放棄した結果です。経営者がビジョンを持たず、提示できないのではないのか。社長自身が本気になって人を探している会社は、意外に若い人が多いのです。

■これからの鋳物産業は、ＩＴなしには考えられない

産地の課題は、これから人口も減っていくし、需要が減少に向かうのは避けられないということ。マーケットの縮小は、川口にかかわらずいちばん大きな問題だと考えます。

そこでいま組合主導で取り組んでいるのが、ＩＴ技術を応用したものづくりです。いままでの鋳物製造は、職人一人ひとりが技術を磨き、経験と勘に頼るところが大きかった。もちろんそれも重要ですが、それだけでは生き残れません。

例えばＣＡＥ（Computer Aided Engineering／製品開発の初期段階からコンピューターを活用して製造を支援する設計技術）のような科学と、技術・技能。それらが車の両輪のように機能することが必要だと考えます。鋳物を製造する過程で、それを科学の力で確認・検証できれば、もっといいものができますから。

これからの時代は開発から製造までのあらゆる場面でこういったＩＴ技術を駆使していかないと、競争力で負けてしまいます。ＣＡＥは、規模の大きい会社であれば自社で持っていますが、川口の鋳造会社は中小が多いので、組合がしっかりバックアップしていく。もちろんＣＡＥだけでなく、ＡＩ（人工知能）やＩｏＴ（モノのインターネット）の発展などが、製造業にかつてない変化をもたらすかもしれません。

企業単体ではできないことは組合が、行政とも協力しながらバックアップする。企業と組合と行政が連携して取り組むことが、地場の産業を残すひとつの道だと思います。

MEMO

川口の鋳物産業史

埼玉県川口市は、古くからの鋳物の街である。鋳物工業の発祥には、平将門に同行していた鋳物師が定着した平安時代説をはじめ諸説あるが、江戸時代になると河川交通の優位性を活かし、隣接する巨大消費都市・江戸に向けた商品の生産が盛んになった。

明治になり、殖産興業として織機など大型機械のフレームを手掛けるようになる。日露戦争を機に川口の鋳物は全国に販路を広げ、好況を呈した。代表作に、１９６４（昭和39）年の東京オリンピックで使われた国立競技場の聖火台や、重要文化財に指定されている「学習院旧正門」がある。

明治10年に学習院が神田錦町に開かれたときの正門。
唐草文様をあしらった鋳鉄製で、文明開化当時の様式をいまに伝えている。川口鋳造技術の真髄。

逸品解題

１００年以上、
技術や技法を受け継いできた伝統的工芸品産地。
日本人の生活に密着、ものづくりニッポンの礎を築いた
「地の知」ともいうべき逸品を通して、
産地産業の現状をお届けする。

秋田県
秋田杉桶樽

宮城県
仙台箪笥

東京都
東京染小紋

日本の醸造業を支えてきた、秋田杉桶樽

森林資源の豊富な日本では、古くから日常生活雑器の主要な素材として樹木が使われてきた。中でも秋田県では秋田杉を原材料とした桶・樽の製造が盛んだった。文献にも、1724（享保9）年には能代に54軒の桶屋があったこと、北海道に向けて鯵や鰯用桶の販売が行われたという記述がある。関西でつくられていた桶とその技術は、東北の中ではいち早く秋田地域に導入された。買い積み制の北前船で畿内の物品や文化が運ばれ、その中に当時としては優れた容器であった桶も入っていたと考えられている。

桶は木製円筒状の容器のことで、樽は酒、醤油などの液体を運搬・貯蔵する円筒形の木製容器と定義されている。秋田杉桶樽協会会長の日景義雄さんの説明によれば「桶と樽は似ていますが、木材の使い方も使う道具も全く違います。桶は上と下が真っすぐですが、樽の場合は真ん中が膨らみを持っています。たがをかける位置も違います。また、樽は蓋が固定されていますが、桶は漬け物樽からも分かるよう、蓋は置いているだけです」。

かつて能代と大館の樽の多くは、千葉の野田や銚子に醤油樽として出荷されていた。需要とスピードに応えるために、部材は「樽丸」と呼ばれる荷姿にして船で運び、現地で組み立てるシステムを確立していたという。「大館駅周辺は全て樽丸業者で、財閥ができたほどです」（日景さん）

しかしプラスチックや金属製の容器が出回るようになると、桶や樽の需要が大幅に減少。商店の開店祝いや正月に酒を振る舞う習慣も、車社会の到来とともに激減しているという。

それでもなお主力製品は一斗樽であり、生産の7割を占めている。若い職人たちが、中の液体が蒸発、あるいは滲出しないように木取りした板を使い、接着剤の類を一切使わずに仕上げる、伝統的な技法を守り続けている。

秋田杉桶樽協会
■秋田県大館市釈迦内字土肥17-3
有限会社日樽内
■TEL:0186-48-4153
ttp://www.chuokai-akita.or.jp/oketaru/

“伊達”な家具、新たな挑戦も仙台箪笥

仙台箪笥協同組合
■宮城県仙台市青葉区郷六字葛岡下10-4 有限会社長谷部漆工内
■TEL:022-302-1505
■http://www.sendai-tansu.com/

宮城県仙台市の地場産業である仙台箪笥は、2015（平成27）年に国の伝統的工芸品に指定された。仙台箪笥協同組合の専務理事、長谷部嘉勝さんは「組合として真剣に取り組んだきっかけは、東日本大震災でした。ゴミの中に仙台箪笥が埋もれているのを目の当たりにしました。震災による流出・破損、引越しで大きな家具を持っていけないという理由で廃棄されていたのです。組合としてそういった箪笥を受け入れるとともに全県調査を行い、指定を受けました」と語る。

●仙台箪笥
明治中～後期につくられた
武士型仙台箪笥

明によれば、伊達者文化の地であったこと、納屋に置かれていた長持ちと違い、居間に箪笥が置かれたということが理由のようだ。特に金具は時代とともに大きく華やかになり、鳳凰や鶴亀、唐獅子牡丹、家紋などあらゆる文様があった。日本海側の酒田や佐渡、小国の船箪笥は鍵を頑丈にすることに主眼が置かれたが、仙台は飾り金具に凝ってきた。

庶民の家庭に置かれるようになった明治から大正中期に、生産のピークを迎える。さらにこのころは第一次世界大戦の際ドイツ兵捕虜が帰国時に仙台箪笥を買ったのがきっかけとなり、ヨーロッパ向けの輸出品として隆盛を極めた。

製作は完全な分業体制になっており、「指物」「漆塗」「金具」の3つの熟練した職人技による。かつては販売者が職人を抱えるピラミッド型になっていたが、現在は指物師であれ塗師であれ、客から受注した者がそれぞれに発注するという、横に連携する体制へと変わっている。

現在、職人の数はピーク時の10分の1。

●秋田杉桶樽
左・2升樽。最近はお菓子を入れるなど
自由な発想で使われている
右・桶の製法でつくる櫃（ひつ）を
現代の生活様式に合うよう浅型にし、
蓋と本体の角隅にご飯が入るのを
防ぐための工夫を凝らした。
グッドデザイン賞受賞。
新しいものづくりへの取り組みを象徴する製品

■h

仙台箪笥は江戸時代末期に仙台藩の地場産業として生まれたとされる。武士が刀や袴を納めることができる幅4尺（約120cm）、高さ3尺（約90cm）の「武士型」を原型とし、武家や商家を中心に使われていた。前面に木目の美しいケヤキを用い、紅色の木地呂塗りを施し、大きくて華やかな打ち出し金具の装飾をつけた派手な意匠は、他の産地の箪笥にない大きな特徴である。長谷部さんの説中でも金具師は3人しかおらず、後継者の養成が急務である。仙台箪笥の場合、金具デザイン、鉄の打ち出しに加え、鍵の作成、引き手の鍛冶と多岐にわたるため、一人前になるまでに最低10年はかかるという。

仙台箪笥では今秋の認定試験を経て、ようやく伝統工芸士が誕生する。本格的な取り組みが始動している。

町人階級に広まったことで豊かな表現と美意識を得た東京染小紋

型染めとは型紙を用いて染める、日本の染色の中でも古い伝統を持つ技法である。現在の東京都千代田区神田紺屋町の一帯は恵まれた水利もあり、江戸時代から続く染色業の中心であった。しかし1923（大正12）年の関東大震災で大打撃を受け、多くの職人たちが新たな川を求めて場所替えをした。その結果、染色業は新宿区、墨田区、八王子市、日野市などへと分散していったのである。

江戸小紋は、江戸詰めの約300諸侯の大名家それぞれが独自の文様を定め、礼装である裃に使用していた「お定め小紋」にルーツをもつ。紀州徳川家が独占的に紀州・白子（現在の三重県鈴鹿市白子地区）で型紙を彫らせることによって、各大名家の文様を管理・保護しており、町人の使用を禁じていた。ところが幕府が奢侈禁止令を出すと、派手な色柄の着物が着られなくなった町人が武家の装いに目を付ける。しかしお定め小紋は使えないので、その柄を身に着けていればお宝が入ってくるといった「いわれ」、いわゆる能書きを付け、お定め小紋とは明確な違いを出していった。それが町人の「いわれ小紋」である。

お定め小紋が江戸小紋、いわれ小紋が東京おしゃれ小紋という形でいまに受け継がれており、それらが東京染小紋として伝統的工芸品に指定された。

東京都染色工業協同組合理事長で、伝統工芸士でもある富田篤さんは「伝統的工芸品だから守らなければならないというのはありますが、芸術品ではないので、時代に合わせて作っていかない限り世の中で生きていけない。さらにきものはファッションですから、時代の流行に合ったものづくりをしなければ。うちはそんな小紋は作らないというのは通用しません。国の保護や援助、制度に甘えていたらいけないのです。自分たちで新しい商品を開発し、お客さんが買いたくなるようなものを作っていく。その努力こそが伝統的工芸品の生き残る道だと思います」。

現在、東京染小紋を手掛けている染色業者は13軒。後を継ぐ者が不在という職人もいるという。型染めに欠かせない型紙を彫る職人の減少にも歯止めがかからず、存続が危ぶまれている。江戸の中心地で培われた伝統の技を継承しながら、いまの時代に何をどのように提案していくか、挑戦が続いている。

東京都染色工業協同組合
■東京都新宿区西早稲田3-20-12
■TEL:03-3208-1521
■http://www.tokyo-senshoku.com/

●東京染小紋
精緻な柄が染められている
江戸更紗（中央）と江戸小紋の着尺

事業所のあった街をたずねて（特別版）

屋台骨を支えた20年を歩く 大型再開発進み、面影遥か

台北篇

1945（昭和20）年8月15日、わが国の敗戦により、帝国興信所（帝国データバンクの前身）も全ての在外資産を失った。13（大正2）年の京城（現ソウル）支所を皮切りに、外地に開設した事業所は、ピーク時には29カ所に達していた。1930年代半ばから国内での調査需要が低迷するにつれ、海外事業所は順調に業績を伸ばし、屋台骨を支えた。台北支所もそのひとつであった。

1935年、台北支所は当時の本町から大和町に移転した。
交差点にかなり老朽化した建物がいまも残っている。

■半世紀に及ぶ日本統治 行政、経済の中心地、台北市

歴史上、台湾は長い間清朝の支配下にあった。それが日清戦争の結果、日本への割譲が決まった。1895（明治28）年6月、日本軍が台北に入り、城内に台湾総督府を設置した。ここから日本の台湾支配が始まり、それは1945（昭和20）年8月まで半世紀に及んだ。

帝国興信所の台湾進出については、13（大正2）年1月、『帝国興信所内報』元旦号にその所在記録が残っている。しかし、23年5月にも現地で活動していた「台湾興信所」に台湾全域の調査を全面委託していた記録もあり、その間のいきさつははっきりしていない。

帝国興信所が台湾で本格的に事業展開したのは、台北に支所を設置した26年2月以降のことと思われる。本所（東京本社）の職員だった丸山輝理が台北支所長に任命され、副長が種子田一二、日報主任・山崎鼎、文書主任・芹澤才一という布陣だった。

台北市は日本統治下、台湾における行政、経済の中心地で、総督府は市内中央にあった。その周辺は清の時代に城が築かれ、城壁で囲まれていたことから城内と称されていた。総督府は城内の都市整備を優先し、学校、銀行、公会堂、病院、図書館、放送局などを次々に建てた。そのために、本土から赴任してきた日本人のほとんどが城内に居住した。城内は南北に分かれ、南側が官庁街、北側が商業区域となった。帝国興信所台北支所もそこに事務所を構えた。台北市本町3丁目7番地、現在の忠孝西路一段72号から82巷付近で、台北駅とは目と鼻の先、徒歩約5分の距離である。忠孝西路は台北城壁跡に沿って走る幹線道路のことで、一帯は東京駅前を模した地域である。当時、本町には第一生命保険、台湾貯蓄銀行、台湾勧業無尽、日本通運などの大手企業の他商店、事務所などが入った鉄筋コンクリート造3階建ての建物が軒を連ねていた。

■一等地に事務所を開設 80年前の市街図から確認

旧台北支所があったと思われる場所には、10年ほど前までパンや洋菓子などを売る

当時の台北市街図には、
「帝国興信所支所」と記載されていた。

旧本町の台北支所跡には、現在大型商業複合施設が建設中。

移転した大和町とは目と鼻の先にある「台北公会堂」。往時の姿をいまに伝えている。
現在は「中山堂」と改称されている。

店舗があった。この一帯は、7年前から大規模再開発が行われており、その場所には、地上36階地下6階の複合テナントビルが建つ予定だ。いま、台北でいちばんの高層建物は「TAIPEI　101」だが、工事中の建物の1軒隣には、2番目に高い51階建ての新光ビルがあり、以前から三越デパートが入っていることでも知られる。当時もいまも旧台北支所があった一帯は、人々でにぎわう繁華な場所、ひと言でいえば一等地に事業所を構えていたわけである。

台北支所開設から9年後の1935(昭和10)年5月、支所長の丸山が定年退職し、代わって本所で『帝国興信日報』を発行する日報部副長の坂井光太郎が着任した。そして支所員が10名を超え、手狭になっていた事務所を本町から同じ城内の大和町3丁目2番地に移転した。当時の住宅地図に支所名が記載されており、その場所を特定することができた。野村生保支店、商工銀行、明治屋、台北印刷、山中茶舗など事務所、商店が隣接。現在は、延平南路に面してかなり老朽化した5階建てビルが残っていた。また、ここから少し歩けば、当時、東京、大阪、名古屋に次ぐ規模だった市民の集会場・台北公会堂があり、「中山堂」と改称されていたが、いまも往時の姿をそのまま伝えている。

■広がる調査担当区域 最後は、指定疎開で消息不明に

旧台北支所は、開設以降、順調に業績を伸ばした。調査担当地域も広がり、調査員は市内だけでなく、台湾物流経済の中心であった、現在の基隆、九份地区を頻繁に往復。新北市、新店市、そして日本の最西端の島、与那国島を望む宜蘭県、羅東郡さらには台東県、花蓮港県にまで足を延ばしていた。

調査件数(受付ベース)は発足初年度の1926(昭和元)年こそ年間1,000件をわずかに上回るに過ぎなかったが、3年後の29年には3,000件を突破し、収入総額は1万1,615円を計上、全国事業所ランキングでも上位に位置した。30年以降は、調査件数は一進一退を繰り返したものの、収入高は36年に入ってから毎年1万円台を安定的に確保、太平洋戦争の始まった41年には、収入高2万826円(調査件数1,783件)を記録、単独事業所としてはベスト10入りをしている。しかし、順調だったのはこの辺りまで。収入高こそ相次ぐ値上げで、大きな落ち込みはなかったものの、調査件数は42年が1,276件、敗戦濃厚となった43年は1,000件に落ち込み、米軍による空襲の始まった44年にはついに500件を下回ってしまった。

そして、本社に届いた最後の営業報告書は、45年5月。4月度の調査件数は23件にとどまり、過去最低だった前年同月実績の半分にも達しなかった。このころ事務所は指定疎開で、台北市外海山郡土城庄大安寮に移転した記録が残っている。市内から南西に約20km離れた、当時は台北から1日1便のバスしかない田園地帯である。すでに台北支所は実質的に機能停止状態にあったようだ。支所疎開後の記録は全くなく、支所長以下職員の消息も不明のままである。

長寿企業約３万社を分析、「老舗出現率」トップは山形県

2008年、帝国データバンク史料館は、老舗をテーマとした特別企画展「日本の会社展第１回　老舗 ー温故知新ー」を開催、大きな反響を呼びました。その後、当館では継続的に長寿企業についての実態を追い、分析データを蓄積しています。

2016年５月、改めて調査を実施。いまから100年前にあたる1916（大正５）年までに創業した企業を対象に、分析した結果をご報告します。

長寿企業とは？

創業100年以上の企業を「長寿企業」と定義。帝国データバンクの企業概要データベース「COSMOS２」（約146万社）から宗教法人や社団、財団その他の公益法人等を除いた131万4,829社（2016年５月17日現在）を対象に、1916年までに創業した企業28,972社を「長寿企業」として取り上げた。

創業時期で見る
江戸開府前160社、業歴500年以上41社

長寿企業を創業時期別に分類すると、明治以降（1868年～）に創業した企業は25,629社。他方、明治維新前（～1867年）に創業した企業は3,343社で、そのうち江戸幕府の開府前（～1602年）に創業した企業は160社であった。

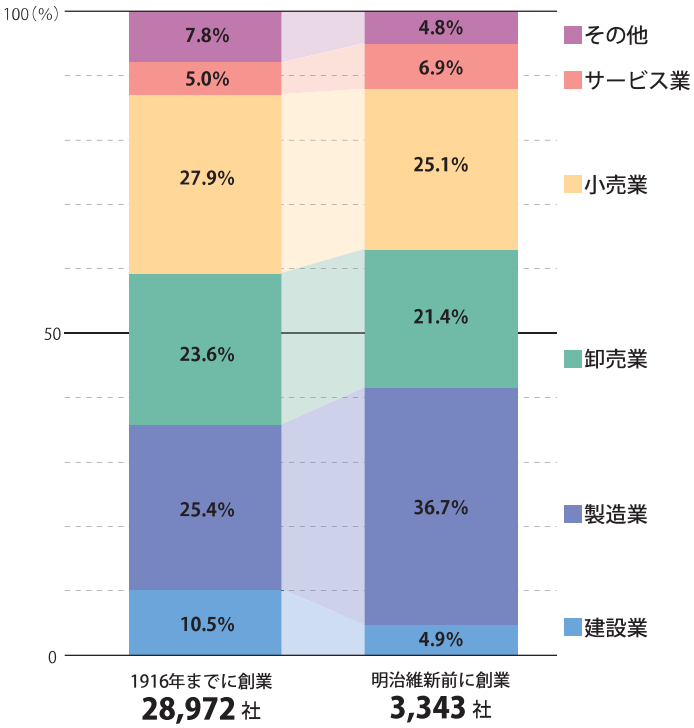
なお、長寿企業を業歴別で見ると、100～199年が27,436社、200～299年が763社、300～399年が559社、400～499年が173社となり、業歴500年以上も41社を数えた。

業種で見る
生活の営みに直結する食がトップ３

長寿企業28,972社を業種別に大分類すると、「小売業」が最も多く、次いで「製造業」「卸売業」の順で、この３業種で全体の76.9％を占めた。

しかし、全長寿企業のうち、明治維新前に創業した3,343社に限って見れば、「製造業」が大きな割合を占めている（グラフーⅠ）。さらに「製造業」1,167社の内訳を見ると、「飲食料品関係」が71.0％を占め、扱い品目別では１位が清酒その他「酒類製造」、２位が味噌、醤油等「調味料製造」、３位が「パン・菓子製造」だった。

【グラフ-Ⅰ】長寿企業　業種別構成比



地域特性で見る
老舗を育んだ日本海

長寿企業28,972社の本店所在地を都道府県別に分類したところ、最も多かったのは東京都の2,656社で、以下、大阪府、愛知県、新潟県、京都府、静岡県、兵庫県と続いた（表ーⅠ）。しかし、これを明治維新前に創業した3,343社に限れば、京都府がトップとなり、以下、東京都、愛知県、大阪府、新潟県、山形県、長野県と続いている（表ーⅡ）。

創業の地から他の都市へ本店を移転している企業も存在するため、一概に本店現在地が創業地とはいえないが、新潟、山形、長野といった「酒どころ」を除けば、現状では企業数の多い大都市圏に長寿企業が集中していることがうかがえる。

一方、COSMOS２データの各都道府県別企業数に占める長寿企業数の割合（出現率）を見ると、若干様相が変わってくる。第１位は山形県、続いて京都府となり、2008年の調査時と逆転した。以下、島根県、新潟県、福井県と続く。滋賀県、長野県もランク入りしており、顔ぶれに大きな変動はない（表ーⅢ）。また、明治維新前に創業した長寿企業数、出現率では京都府が不動のトップを占め、まさに古都・老舗の町であることを証明している（表ーⅣ）。

■長寿企業数トップ10

【表-Ⅰ】

順位	都道府県名	長寿企業数
1	東京都	2,656社
2	大阪府	1,532社
3	愛知県	1,517社
4	新潟県	1,319社
5	京都府	1,255社
6	静岡県	1,085社
7	兵庫県	1,047社
8	北海道	925社
9	長野県	889社
10	埼玉県	825社

1916年までに創業 **28,972** 社

【表-Ⅱ】

順位	都道府県名	長寿企業数
1	京都府	312社
2	東京都	283社
3	愛知県	165社
4	大阪府	145社
5	新潟県	138社
6	山形県	128社
7	長野県	119社
8	兵庫県	109社
9	埼玉県	106社
10	静岡県	105社

明治維新前に創業 **3,343** 社

■長寿企業出現率トップ10

※出現率とは、都道府県別企業数に対する長寿企業数の割合

【表-Ⅲ】

順位	都道府県名	出現率
1	山形県	4.87%
2	京都府	4.75%
3	島根県	4.49%
4	新潟県	4.33%
5	福井県	3.89%
6	滋賀県	3.89%
7	長野県	3.72%
8	富山県	3.56%
9	石川県	3.33%
10	奈良県	3.27%

1916年までに創業 **28,972** 社

【表-Ⅳ】

順位	都道府県名	出現率
1	京都府	1.18%
2	山形県	0.88%
3	石川県	0.71%
4	滋賀県	0.63%
5	福井県	0.56%
6	長野県	0.50%
7	島根県	0.49%
8	奈良県	0.48%
9	新潟県	0.45%
10	佐賀県	0.43%

明治維新前に創業 **3,343** 社

企業や団体、学生・生徒の皆さんの来館が増えています！

帝国データバンク史料館は、開館から多くのお客さまを迎えてきましたが、最近は特に、企業や団体の研修の場として、大学との合同ゼミ研究会や高校・中学校の研修旅行の一環として利用される機会が増えています。

当館では、信用調査の歴史だけでなく、国内企業博物館の動向や長寿企業分析を交えた地域と企業のかかわりなど、研修、見学テーマに応じた講話と展示室見学を組み合わせてご案内しています。

ここでは、最近お迎えしたお客さまをご紹介します。

■東洋英和女学院大学様
昨年に引き続き2回目の
インターンシップ実習を受け入れ、
就業体験をしてもらいました。

■岐阜県高山市立中山中学校様
3年生の皆さんが、
修学旅行（東京研修）で来館されました。
信用とは何か、そして地域と企業について解説し、
展示室見学を行いました。

■東京都・町田市教育委員会様
「2016年度 教員の民間企業研修」の
一環で来館されました。

■富山県立南砺福光高等学校様
2年生の皆さんが見学研修で来館。
企業信用調査と、富山県企業の
紹介を交えた講話を行いました。

**■一般社団法人企業研究会
社内広報担当者交流会議様**
常設展示を見学し、
「信用調査業の歴史」を説明しました。

■日本郵便株式会社東北支社様
長寿企業をテーマとした
「時代を超えて生き残る企業の条件」を
説明し、映像視聴、展示室見学を
行いました。

TEIKOKU DATABANK Historical Museum
Muse 2016.9 Vol.28

表紙のご案内

帝国興信所　社旗

制作時期ははっきりしないが、帝国興信所時代には社旗が定められていた。桜に「信」のマークを中心にあしらった社旗は、普段、本社（第二帝興ビル）４階の講堂・至誠堂に立てられ、会社行事の際に使用していた。1927（昭和２）年頃に結成された帝興ボーイスカウトメンバーの行進で隊を先導し、観衆の注目を集めたことや、30年５月28日に開催した「帝国興信所創業30周年記念式典」では、会場となった東京両国国技館の屋上に掲揚したことが記録に残っており、長く当社を象徴する存在であった。

帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8　TEL.03-5919-9600（直通）

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

［入 館 料］　無料
［開館時間］　10:00～16:30（入館は16:00まで）
［休 館 日］　土・日・月曜日および祝日、年末年始
（その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。）

交通のご案内

［ＪＲご利用］	中央線・総武線 市ケ谷駅	徒歩8分
	中央線 四ツ谷駅	四ツ谷口から徒歩9分
［地下鉄ご利用］	南北線・有楽町線 市ケ谷駅	7番出口から徒歩6分
	都営新宿線 曙橋駅	A4番出口から徒歩9分
	丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅	2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp

帝国データバンク史料館だより《Muse Vol.28》2016年9月発行
©帝国データバンク史料館